

[社 会]

覚える社会科から考える社会科への転換を図る学習指導

— 単元を貫く課題づくりを意識した5学年「日本の工業生産の今と未来」の実践から —

岩野 学*

1 はじめに

近年、社会科嫌いの子どもの数が増えてきているという話を聞くことが多い。その証拠に、吉本（2015）が行った小学校高学年を対象とした好きな教科調査では、1990年の調査開始以降、社会科が好きな児童の割合は全て最下位となっている。社会科嫌いの児童はその理由について、「覚えることが多いから」「教師の話聞くだけで面白くないから」といった回答が多数を占めている。児童の中では、「社会科＝覚える教科」という意識が高いことがうかがえる。

覚える教科という児童の意識に対して、学習指導要領（社会編）ではその中で、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり、統合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすることとしている。つまり、社会的事象をただ知識として習得させるのではなく、事象同士を関連付け、考えながら学習することが必要だといえる。さらに、社会科の目標達成や、深い学びの実現のためには、「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や説明、議論等の学習活動が組み込まれた課題を追求したり解決したりする活動が不可欠であると述べられている。その中には、主として用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、主として社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するように学習を設計することが求められると記載されている。

考える社会科への転換について、泉（2020）は自身の論の中で、教師の考えと児童の思考との乖離が引き起こされることが危惧されると警鐘を鳴らしている。その中で泉は、教師は児童に考えさせるべき“本時の課題”は理解されていて、その課題を常に意識して発しているが、児童は教師の質問にただ答えているだけという事態が引き起こされていると述べている。教師によって「言われた重要な語句や文章」を意識し、それがテストに出題される。こうして児童は、自らの論理とはかけ離れた部分を知識として保存してしまい、暗記教科としての社会科のイメージが強くなってしまふとある。教師が学習課題を考えることは重要なことであるが、課題に答えさせようとするあまり、本質である児童自身の考えの部分が目立たなくなってしまうことに、考える社会科への転換が容易ではないことが見て取れる。

池田（2006）は、このような教師と児童との考えの乖離について、児童が見付けた事象や情報を、多くの観点で整理し関連付けられず、最終的に教師がまとめて終わりということが多くと述べている。自身のこれまでの社会科の学習を振り返ると、問題解決型の授業や体験的な授業を多く取り入れてきたと考えていたが、単元や本時のねらいに固執するあまり、泉が述べている教師と児童の考え方の乖離が生まれている状態になり、池田の論じている教師が最後にまとめて終わるといふ学習になることが多かったように感じられた。このような学習では、児童の考えの幅が狭まり、児童自身の考えが見えなくなってしまうということが予想される。

そこで、本実践では小学校5年生「日本の工業生産の今と未来」という単元を中心として、児童が単元を通して課題に対して柔軟に考えを巡らせることができるようにする。児童の疑問や意見の相違をもとに、単元を通じた学習課題を設定し、学習を進める中で課題に対する自身の考えや答えがどのように変化したかを見取るという実践を試みる。児童が主体となって考える授業を目指し、知識の習得のみに捉われない「考える社会科」の学習への転換につながるかを明らかにしていきたい。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究は、児童の思考のズレが生まれるように単元を通じた学習課題を設定したり、効果的に資料提示をしたりし、

*上越市立大湊小学校

児童が自ら考える場面を増やすことが、「考える社会科」へと児童の意識が転換する有効な手立てとなるのかを、児童の変容を基に明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の方法

① 学級全体の共通課題を設定する。

本研究では、単元を通した学習課題を設定することで、学習の到達地点を明確にする。全体で共有した1つの共通課題に向かうことで、思考の過度な拡散を防ぐことはもちろん、「何について考えるか」ということがはっきりするため、常に課題に向かって考えたり調べたりする姿が見られるようになることを考える。共通課題の設定には、教師誘導型の学習にならないようにするために、単元の前段でいきなり提示をするのではなく、はじめに知識を習得する学習を取り入れる。そうすることで、既知の事実との違いや友達との考えのズレに対して根拠をもって説明することができ、学級全体で単元を通した学習課題の解決に向かうことができる。

② 児童へ提示する資料を分析し、必要な資料を効果的に提示する。

資料の提示についても意識をして提示をする。社会科の学習では、様々な資料を用いて調べていくことで思考の深まりにつながるが、教師が用意した資料をただ提示するだけでは児童が混乱してしまい、学習課題へとつながらなくなってしまう恐れがある。そこで、教師が事前に提示資料の精選・分析を行い、場面に合った資料の提示を行えるように準備をする。また、学習課題をつくる導入部では、資料の提示を極力少なくすることで児童の考えの方向性を揃え、つぶやきや疑問を拾いやすくしていく。そうすることで、泉（2020）の話す学習課題に対しての教師と児童との認識の乖離を防ぐことができると考える。

③ 児童の思考を視覚化し、自身の立場を明確にさせる。

思考の場面では、jamboardを用いて自身の立場を表現させる。ここで考えにズレが生じていれば、複数の立場に立った思考が生まれていることになる。自身の立場を視覚的に表すことで、他者の考えにも意識が向き、質問をしたり、より自分の意見に説得力をもたせるために思考を深めたりすることが予想される。また、自身の立場の変化も見ることができ、思考が変化した要因も見取れる利点もあると考えられる。

3 授業の実際

(1) 単元名 「日本の工業生産の今と未来」

(2) 単元の目標

- ・我が国の工業生産について、工業の種類や地域分布等の概要や、工業生産が国民生活の向上に重要な役割を果たしていることを理解する。
- ・我が国の工業生産の概要や特色を様々な資料から考え、大工場と中小工場が国内の生産に与える影響を説明したりそれらを基に議論したりする。

(3) 単元の指導計画（全8時間）

次	時	◆学習内容 ○学習活動
1	1	◆身の回りの工業製品について調べる。 ○工業製品にはどのようなものがあるのか、仲間分け活動を通して理解する。 ○身近な工業製品について調べ、「どこで」「どのくらい」生産されているのかを考える。
	2	◆日本の主な工業地帯と生産の特徴について調べる。 ○工業の盛んな地域の分布や各地域の特色を読み取り、その理由を考える。
2	3	◆中小工場について知り、その特徴を調べる。 ○大工場と中小工場の特色や違い、その役割について動画や写真、グラフ等の資料を用いて考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">【単元を通した課題の設定】中小工場は本当に必要なのだろうか。</div>
	4	◆身近な工業製品や工場について調べる。 ○新潟県内（燕市・三条市）の中小工場の様子を調べ、身の回りの工業製品への関心を深める。 ○県内の工業製品の特徴を考え、中小工場働く人の想いや願いを知る。

	5	◆中小工場から生み出される工業製品について知り，中小工場の強みを改めて考える。 ○近年注目されている具体的な工業製品を例に挙げ，工業生産が人々の暮らしに果たす役割や各種工場の必要性について考える。
3	6	◆日本の工業生産の現状を知り，これからの日本の工業生産について考える。 ○日本の工業生産の現状について複数の資料を関連させて読み取り，これまでの学習と関連させながら，日本の工業生産はどうなるのかを考える。
	7	◆日本の自動車生産を例に，国内生産と海外生産の関連性について考える。 ○日本の自動車の海外生産が増えている様子とその理由を資料から読み取り，海外生産が増えることの影響について考える。
	8	◆学習を通じた自身の考えをまとめ，紹介する。 ○「中小工場は必要なのか」という単元を通じた課題について学習を通して考え，根拠を示しながら自身の考えを表現する。

(4) 児童の実態

本児童は，第5学年の男子21名，女子12名の学級である。4月に行った意識調査では，社会科に対してほとんどの児童が否定的な意見として捉えていることが分かる。苦手な理由を見ても，「覚えることが多いから」「話を聞くだけで面白くないから」といった意見が多くあったことから，児童は社会科を覚える教科として強く認識していることがうかがえる。また，自分の考えをもったり，表出したりすることにも抵抗があることも分かる。自分で考えることに意識が向かないことで，学習への意識の低下が生まれ，否定的な回答へとつながったと考える。

この結果を受け，社会科に対しての意識を向上させる手立てとして，上記に挙げた課題の提示や振り返りの充実等を講じ，児童の意識変化を見ていくこととした。

(5) 指導と活動の実際

本単元では，教師が一方的に課題を与えるという方法でなく，児童が自ら生み出した疑問や認識の相違を中心にして学習課題を設定した。

第1次は，主に知識的なことを中心とした内容である。工業製品と言われてもどのようなものが当てはまるのかということを理解していない児童がほとんどであった。まずは教室内にある様々な物に着目させたことで，様々なものが工業製品として生産されていることを知り，「自分の身の回りの物がどのくらい工業製品なのだろうか」という疑問が生まれ，各自で調査をした。結果的に私たちの身の回りにあるほとんどのものが工業生産によって生み出されたものであることを理解した。また，地域ごとの工業生産の特色の学習では，各地域によって工業生産に特徴があることを知った。

第2次は，大工場と中小工場の生産量の変化や特色を学習する内容である。この学習で，後述する単元を通じた共通の学習課題をつくった。学習のはじめに，大工場と中小工場の日本国内における工場数，働いている人の数，生産額の割合の違いを帯グラフで表した資料を提示して比較を行った。資料の中でも工場数が圧倒的に少ない大工場が，中小工場よりも生産額が多いことに児童は着目した。本来であれば，工場数の多い中小工場の生産額の方が圧倒的に多いのではないかと児童の考えと実際の生産額が噛み合っていないという事実が学級全体が反応したことで共通課題がつけられた。

第3次は，国内生産と海外生産との関連を調べた。2次までに中小工場の特色や必要性について学習し，国内の工業生産の関係性について自分なりの考えをもつことができた。ここでは，対象を海外にまで広げ，現在日本が直面している工業生産の状況や課題を学習し，改めて日本の工業生産について考える時間を設けた。

表1 児童の社会科に対する意識調査（4月）

	はい	いいえ
Q1.社会科の授業は好きですか	4	29
Q2.社会科の学習中に自分の意見や考えをもって取り組んでいますか	2	31
Q3.自分の意見や考えを発表（表出）することは得意ですか	8	25
Q4.社会科が好きな理由は何ですか ※自由記述	・調べるのが好きだから（3） ・答えを見つけやすいから（1）	
Q5.社会科が苦手な理由は何ですか ※自由記述	・覚えることが多いから（20） ・話を聞くことが中心だから（13） ・面白さを感じないから（5）	

単元において、単元を通した共通の学習課題を生み出すきっかけとなった学習は、3時間目の「大工場と中小工場」の学習である。この時間に、中小工場についての学習が始まった。教師が提示した大工場と中小工場とを比較する資料から生み出された児童の疑問は、大工場と中小工場との規模数と生産額との関係であった。工場数は圧倒的に中小工場が多いにも関わらず、生産額は大工場の方が全体の50%以上を占めているということに疑問が生じた児童が大半を占めた。既習事項として大工場の特色や役割について学習をしていた児童らは、「大工場は人も機械もたくさんあるから、中小工場が無くても何でもつくることができるのではないかと考え、「中小工場は本当に必要なのか？大工場をもっと増やせば生産数も上がるのではないかと」という共通の課題へとつなげた。

また、本単元では学級全体の思考の変化を一人一人の児童が見取れるようにするため、jamboardを使用した。図1は、3時間目の学習を終えた段階での学級内の様子である。全体的に中小工場よりも大工場をもっと増やしていった方がよいという意見と、中小工場は必要であるという意見の2つに分かれていることが分かる。大工場を増やした方がよい主な理由として、「大工場は設備も人も揃っているから、中小工場の仕事もできるのではないかと」「生産額を増やすには大工場が必要」といったものが挙げられた。中小工場が必要であるとした児童の主な理由としては、「細かい作業ができるから」「大工場は関連工場のような小さな工場の力があって機能しているから」といったものが挙がった。それぞれの理由から見ると、どちらの立場の児童も、既習事項である大工場の特色を生かしながら自身の立場を明確にしている。

4時間目、5時間目には、世界的に有名な燕三条の工業製品に着目したり、中小工場が生み出した様々な商品を調べたりして、自身の身近な工業製品についての学習を行った。中小工場の特色でもある技術力や細かい部分まで考えた製品という視点に着目したことで、「大工場でここまで細かい作業をすることができるのだろうか」という疑問が生まれ、考えが変化したことが図2よりうかがえる。

第3次では、海外生産と国内生産との関連を調査した。国内の大工場の拠点が海外に移ってきている現状を知り、改めて中小工場の必要性について考え直すと、児童からは様々な意見が挙がった。

「中小工場は本当に必要なのだろうか」という共通の課題に対しての児童の結果は図3の通りである。この課題について、第4時から第8時で思考を深めてきた結果、大工場は生産能力を生かすと結論付け、中小工場の技術はこれからの日本の工業生産に必要なだと学級全体でまとめた。中には「日本の伝統的な技術を守っていく」という意見も見られた。

4 実践の考察

ここでは、それぞれの立場で学びを記述した3名の児童を抽出し、学習中の考えの変化を考察した。

まずA児である。A児は、自動車工業で学習をした関連工場と中小工場の特色とを関連させながら自身の立場を、

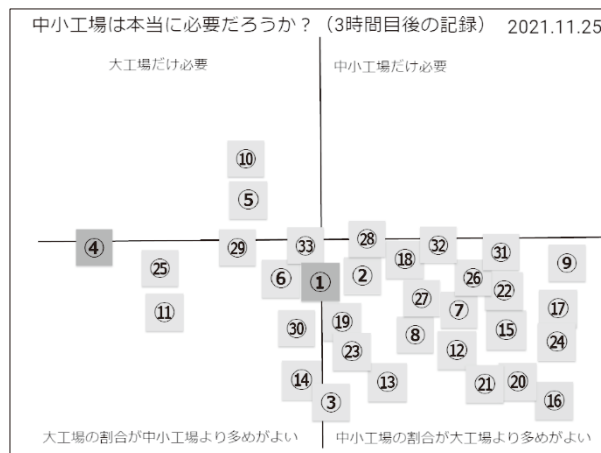


図1 3時間目後の学習課題に対する児童の立場

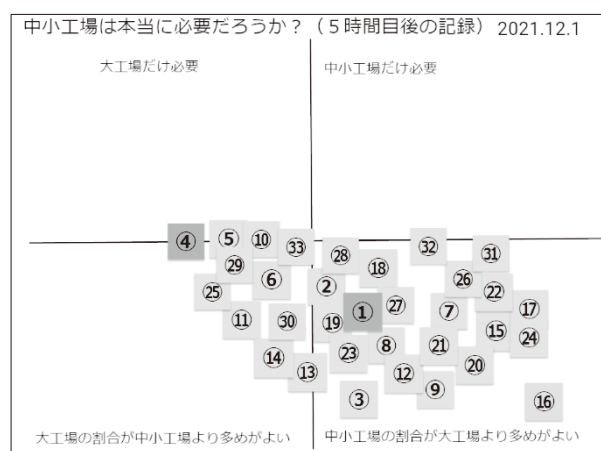


図2 5時間目後の学習課題に対する児童の立場

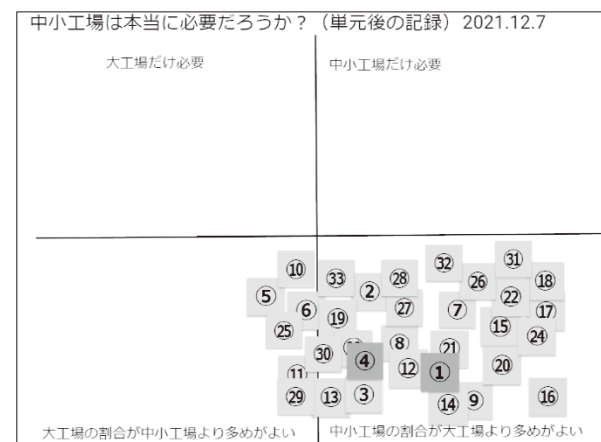


図3 単元後の学習課題に対する児童の立場

「大工場と中小工場のバランスが大切。中小工場は絶対に必要である」とした。また、「大工場は大量生産をし、中小工場は技術力の高さを生かした生産でバランスをとる」という記述から、A児は現在の日本の工業生産の仕組みを継続することが必要という意見であることが読み取れる。次にB児の考えである。B児は、それぞれの工場の良さを挙げながらも、デメリットを考えた上で結論を出そうとしたことがうかがえる。しかしB児は、3時間目の学習の中では結論を出すまでに至らず、悩んでいる様子が見られた。最後にC児である。C児は大工場で中小工場の作業を行うという、中小工場は必要ないと意見であった。また、働いている人に着目し、「大工場の人出がいれば、中小工場と同じことができるのではないかと結論付け、生産量を挙げていくためには大工場の方が大切であると結論付けた。(表2)

表3は、第2次が終了した際の3名の児童の記述である。ここで立場に変化が生じたのはB児とC児である。自身の立場に悩んでいたB児は、中小工場の技術力の高さや様々な生産品を調べ、「大量生産は、中小工場の技術力があってこそそのものではないか」と中小工場の必要性が高まったととれる記述が見られた。また、中小工場は必要ないと話したC児は、学習の中で「果たして大工場でここまで細かい技術を再現することができるのか」と疑問を呈し、自身の立場が揺らぎ始めてきたことを表す記述が見られた。

表4は、単元全体の学習が終了した後の3名の児童の記述である。A児は単元を通して自身の立場の変化は見られなかった。しかし、学習を進めていくことで既習事項と新しく学習した内容を結び付けながら自身の考えを明確に表現することができた。自身の立場に悩んでいたB児は、最終的に中小工場は必要であるという結論に至った。C児は最終的に「中小工場は必要である」という意見に立場が変化した。様々な学習を進めていく中で、「技術力」という視点をもとにして考察していったことが分かる。

3名以外の他の児童においても、自身の立場に至った理由や根拠を明確に表現している児童がほとんどであった。

5 成果と課題

(1) 研究を通じた成果

児童が疑問に思うことやズレを中心に学習課題を設定したことは、社会的事象に積極的にかかわり、「社会科は覚える学習」という概念を変えたことにつながったのではないかと考える。学年末に行った社会科に関するアンケートを見ると、4月当初社会科の学習に否定的であった児童も全て肯定的な評価へと考えが変化していることが分かった。また、肯定的に捉えている理由として多く挙がっていたのは、「考えることが好き」という内容のものである。これは、児童が単に課題を考えさせられているのではなく、自身で考える価値を見出すことで「覚える社会科」という意識が薄くなってきたのではないかと推察した。このことから、教師が与えた課題に対し、ひたすら考えるよりも、児童が率直に感じた思いや疑問を解決していくという学習こそ本当の「考える社会科」への転換の鍵となるのではないかと考えた。

表2 3時間目後の児童の学びの記述

学習後の学びの記述（3時間目後）	
A児	私は、中小工場は必要だと思います。中小工場は関連工場みたいな役割があります。大工場は多くの関連工場によって成り立っているのですが、今の工場数のバランスをくずしてしまうと、大工場での大量生産ができなくなってしまうと思いました。
B児	中小工場はとても技術力が高く、日本の自慢だと思いました。でも、大工場も細かい部分まで考えて作業をしているので、中小工場の仕事を大工場でもやれると思います。中小工場が必要かどうかはまだ結論が出ません。
C児	中小工場の仕事を大工場であればよいと思います。大工場には人手が多くなります。人数は少ない中小工場も、大工場で行えば、安定して働くこともできるのでよいと思いました。

表3 2次終了後の児童の学びの記述

学習後の学びの記述（2次終了後）	
A児	日本の技術力の高さは、中小工場のおかげだと思います。大工場も確かに技術力はあるけれど、こんなに細かい部分まで考えて作ることもできる中小工場が無いと、日本の工業生産は成り立たないと思います。
B児	私は前回、自分の立場になやんでいました。今回様々な工業製品を調べて、日本の大量生産は中小企業の技術力があるからこそ成り立っているのではないかと思います。中小工場は大切だと感じました。
C児	中小工場の技術力はすごいと思います。私は大工場があればよいと思っていましたが、本当に大工場がこれほどの細かい仕事を再現できるのか疑問に思いました。中小工場も必要なのではないかと少し考えが変わりました。

表4 単元終了後の児童の学びの記述

学習後の学びの記述（単元終了後）	
A児	大工場には多くの人で大量生産ができると自動車工場の学習で習いました。中小工場には技術力があります。今の日本はおたがいが協力し合いながら工業生産を進めています。中小工場は絶対に必要です。今の大工場と中小工場のバランスを保ちながらこれからもいけばよいと思いました。
B児	私は、中小工場は必要だと思いました。中小工場の最大の特徴は技術力です。大工場はたくさん生産できるという点を生かし、中小工場は何でもつくり出せる点を生かして大工場の生産を支えるようにするとよいと思いました。
C児	私は、はじめ大工場の方が大事だと思っていましたが、学習を進めていく中で中小工場の技術力を知りました。大工場は人がいるけれど、ここまでの技術を取り入れることは時間的にも難しいと思います。中小工場の役割も大事だと思いました。

単元を通した共通の学習課題を設定したことで、学習のゴールへの見通しをもち、「何を調べるか」「どんな資料が必要か」といったことについても意識をするような様子が見られた。今まで社会科は教師の話聞いて「覚えるもの」と感じていた児童は、目的に向かって考えたり調べたりする活動を継続的にやり、社会事象に対する興味や関心が大いに向上した。

また、思考の変化を自身で見取れるようにしたことで、積極的に意見交換をしたり、同じ立場の人と協力して調査を進めたりするといった児童の主体的な学習の姿勢が見られる結果となった。結果的に社会科の学習を「楽しい」と感じる児童が増えたと言える。

本研究で行った、学習課題の精選や単元構成の工夫、児童の意欲へのアプローチといった取組は、総じて「考える社会科」への転換につながったと考える。この実践では、「覚える社会科」の特徴として泉（2020）が挙げている、教師が用意した質問を児童が淡々と答えるだけの学習とならないように、主に児童の意欲や主体性に焦点を置いた取組とした。樋田（2015）や吉本（2015）も、その中で多様な学習方法を用いることで児童の理解度が向上したことを挙げている。本研究では、決められた方法で学習するのではなく、児童が自らの力や友達との交流の中で答えを見付けたり、考えを既習事項と結び付けたりする学習が社会科に対する意識を変容させるものとして有効に働いたと考える。

(2) 課題

社会科を「覚える」という概念から「考える」概念への転換を図ることを意識して実践を進めた。児童の思考の変化はアンケートやノート記述等からも「楽しい」と思えるようになった、「考えることは面白いと感じた」といった振り返りも見られたことは1つの成果と言える。反面、課題としては2点挙げた。1点目は資料提示の難しさである。どのような資料を選択して提示すれば、児童が自然な形で疑問を感じ取ることができるかということを考えていくことは、授業の流れと同時に児童の思考も考えていかなければならないため、非常に難しい。児童の思考も想像しなければ、教師と児童との認識の乖離が生じてしまう。目の前にある資料をただ提示するのではなく、その資料から何を読み取ることができるかということを常に考えて資料分析を行っていききたい。2点目は、表現力の育成である。自分の中で考えることはできても、それを言葉として表現する力が整っていないと伝えたいことを伝えられず、「楽しい」という感覚も薄れてしまう。他教科とも連携し、自分の考えを表現していく力も養っていきけるようにしていきたい。

児童に任せる学習ではなく、教師がベースをつくり、児童が学習をつくり上げていくという学習を意識してこれからの社会科の学習を進めていきたい。

参考文献

- 池田岳康 「社会科思考力を育成する小学校社会科指導の展開－社会事象を調べ、事象や情報を検討、比較することにより、社会の特色や関連を考え気付く児童を目指して－」『教育実践研究』第16集 上越教育大学学校教育総合センター 2006年。
- 泉 長顯 「考える小学校社会科をどう創るか～実践：暗記からの脱却」『明星大学教職センター年報』第3号 2020年。経済産業省ホームページ 「日本の工業－大工場と中小工場」
<https://www.meti.go.jp/statistics/toppage/topics/kids/industry/factory.html> 2021.11。
- 樋田大二郎 「学習をめぐるうれしい変化と心配な変化」『第5回学校基本調査報告書』ベネッセ教育総合研究所 2015年。
- 文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』日本文教出版 2018年。
- 吉本真代 「学校での学習」『第5回学校基本調査報告書』ベネッセ教育総合研究所 2015年。

表5 児童の社会科に対する意識調査（3月）

	はい	いいえ
Q1.社会科の授業は好きですか	33	0
Q2.社会科の学習中に自分の意見や考えをもって取り組んでいますか	33	0
Q3.自分の意見や考えを発表（表出）することは得意ですか	30	3
Q4.社会科が好きな理由は何ですか ※自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・何かを調べることが好きだから (15) ・疑問の答えを考えることが好きだから (18) ・自分の考えを書くことが好きだから (13) ・学習したことの「つながり」を実感できるから (15) ・自分の調べたいことが見つかるとうれしいから (10) 	
Q5.社会科が苦手な理由は何ですか ※自由記述	記述なし	